

日本英文学会東北支部 第73回大会資料

時：2018年12月1日(土)

所：山形大学小白川キャンパス
人文社会科学部1号館
(山形市小白川町一丁目4-12)

日本英文学会東北支部事務局

〒980-0845 仙台市青葉区荒巻字青葉149
宮城教育大学 英語教育講座 竹森徹士研究室内
電話：022-214-3496／E-mail：tohoku@elsj.org

第73回大会懇親会のご案内

第73回大会懇親会を以下のように開催致します。詳細および申し込みにつきましては、11月に支部会員宛に別送する案内をご覧ください。大会会場の山形大学より懇親会会場までバスが出ます。懇親会にもご参加下さいますようお願い申し上げます。

【日時】 2018年12月1日(土) 午後6時30分～8時30分

【場所】 山形国際ホテル(山形市香澄町3-4-5)

日 本 英 文 学 会 東 北 支 部

2018年度 大会役員一覧

(敬称略・五十音順)

支 部 長	大河内 昌				
副 支 部 長	佐々木 和貴				
理 事	石橋 敬太郎	大西 洋一	奥野 浩子	金子 淳	
	金子 義明	川田 潤	鈴木 亨	鈴木 雅之	
	竹森 徹士	村上 東			
大会準備委員	佐藤 恵	鈴木 淳	金子 淳	星 かおり	
	三上 傑	五十嵐 啓太			
開催校委員	中村 隆				
事務局	竹森 徹士(事務局長)		島 越郎(事務局長補佐)		
	佐藤 亮輔(事務局員)				

日本英文学会東北支部第73回大会プログラム

時：2018年12月1日(土)

所：山形大学小白川キャンパス 人文社会科学部1号館
(山形市小白川町一丁目4-12)

理事会 10時30分より(25演習室)

新理事会発足準備会 11時30分より(25演習室)

開会式 12時30分より(201教室)

□開会の辞

日本英文学会東北支部長

大河内

昌

研究発表

第1発表 13:00 - 13:30

第2発表 13:30 - 14:00

第3発表 14:00 - 14:30

第4発表 14:30 - 15:00

第一室(201教室)

司会 山形大学講師

三 枝 和 彦

1. 赤ずきんちゃんの戦略

東北学院大学特任准教授

相 田 明 子

2. ヴァージニア・ウルフのフィクション論の一考察

——短編小説を手掛かりとして——

東北学院大学(非)

漆 原 幸 子

司会 山形県立米沢女子短期大学准教授

小 林 亜 希

3. Following Takamori Saigo: アラン・ブース『西郷隆盛の道』における鹿児島表象

八戸工業高等専門学校准教授

菊 池 秋 夫

4. アクセルはベアトリスのもとに行くだろうか? ——『忘れられた巨人』と語り

弘前大学准教授

小野寺 進

第二室(204教室)

司会 尚絅学院大学准教授

中 山 悟 視

1. 『遠い声、遠い部屋』におけるアフリカ系アメリカ人の考察

——ミズーリとジーザスを中心に——

東北大学大学院

徳 永 慎 也

司会 秋田大学教授

村 上 東

2. “Fishing for Victory?”

——ヘミングウェイ「大きな二つの心臓のある川」と第一次世界大戦

八戸工業大学助教

畠 山 研

3. 司馬遼太郎が見たアメリカ

山形大学准教授

金 子 淳

第三室 (203 教室)

- | | | |
|--|----------------|---------|
| | 司会 東北大学講師 | 三 上 傑 |
| 1. 比較相関構文の移動分析 | 東北大学大学院 | 廣 川 貴 朗 |
| <hr/> | | |
| | 司会 会津大学短期大学部講師 | 五十嵐 啓 太 |
| 2. 名詞化における「非顕在的具現」と「顕在的具現」の対立：
「形態的有標性の仮説」に基づく日英語比較 | 新潟食料農業大学講師 | 西 牧 和 也 |

SYMPOSIA (15:15 - 17:30)

英米文学部門 (202 教室)

モダニティの問題としての“dissociation of sensibility”を再考する

- | | | |
|-------|---------------|---------|
| 司会・講師 | 東北文教大学短期大学部教授 | 今 井 裕 美 |
| 講師 | 東京学芸大学教授 | 大 田 信 良 |
| 講師 | 山形県立保健医療大学准教授 | 梶 理和子 |
| 講師 | 成城大学教授 | 吉 田 直 希 |
-

英語学部門 (203 教室)

語用論と他分野のインターフェース——言語学内外での語用論の応用可能性を探る

- | | | |
|-------|-------------|---------|
| 司会・講師 | 東北大学講師 | 三 上 傑 |
| 講師 | 常磐大学准教授 | 高 木 幸 子 |
| 講師 | 常磐大学助教 | 坂 本 暁 彦 |
| 講師 | 広島大学特任講師 | 草 薙 邦 広 |
| 講師 | 会津大学短期大学部講師 | 五十嵐 啓 太 |

13時

研 究 発 表

第一室 (201教室)

司会 山形大学講師 三 枝 和 彦

赤ずきんちゃんの戦略

東北学院大学特任准教授 相 田 明 子

「お伽噺」は誰のために書かれているのだろうか。本発表ではシャルル・ペロー (Charles Perrault, 1628-1703)、グリム兄弟 (the Brothers Grim; Jacob Ludwig Carl, 1785-1863. Wilhelm Carl, 1786-1859)、アンジェラ・カーター (Angela Carter, 1940-92) の描いた『赤ずきんちゃん』(一般的に英訳にはペローの *Little Red Riding Hood* が用いられる) をとりあげ、1697年のペローの『童話集』出版から数え、約300年以上もの間西欧で親しまれている赤ずきんちゃんが、それぞれどのような読者を意図して書かれたものなのか、考察を深めたい。主人公・登場人物・プロット等が、時代を経てどのように変容してきた(あるいは変化していない)のだろうか。そのあたりを比較することによって、「お伽噺」というジャンルの起源と発展の道程をたどりつつ、「お伽噺」に内在する役割を再確認したい。

ヴァージニア・ウルフのフィクション論の一考察 ——短編小説を手掛かりとして——

東北学院大学(非) 漆 原 幸 子

ヴァージニア・ウルフ (Virginia Woolf, 1882-1941) の短編小説には、長編小説のために実験的に書かれたものだけではなく、メタ・フィクションの構造を持ち、エッセイのフィクション論に対応しているものもある。例えば、“An Unwritten Novel” は、キャラクター造形をテーマとしたエッセイ “Mr. Bennett and Mrs. Brown” と対を為すメタ・フィクションであり、“The Lady in the Looking-Glass: A Reflection” は、対応するエッセイはないが、異質物語世界的な語りを装う等質物語世界的な語り手が鏡に映ったものを描写して行く中で作り出された人物像の虚構性が最終的に暴露されるという前者と類似する構造を持つ。本発表では、これらに類似した構造が他の短編小説でも戦略的に使用されるだけでなく、その語りの偽装性とテーマが関連していることに着目し、エッセイと照らし合わせながら検証し、ウルフのフィクション論を考察したい。

司会 山形県立米沢女子短期大学准教授 小 林 亜 希

Following Takamori Saigo: アラン・ブース『西郷隆盛の道』における鹿児島表象

八戸工業高等専門学校准教授 菊 池 秋 夫

旅行記文学においては、旅のきっかけとなるのがその地にまつわる詩や小説、英雄や豪傑の歴史エピソードであることが少なくない。物語（それが歴史ロマンであれフィクションであれ）が、旅で訪れる地に関して、イメージ形成に大きな役割を果たしてきたことは疑い得ないにもかかわらず、そのメカニズムに詳細な分析をされてきたとはいいがたい。

アラン・ブース (Alan Booth, 1946～1993) の『西郷隆盛の道』(*Saigo's Last March*) における西郷隆盛と西南戦争という歴史物語を旅のモチベーションとして位置づけ、そこから得られた鹿児島のイメージがテキスト中の鹿児島表象や西郷隆盛表象とどのようにかかわっているか検討し、旅人としてのブースの意識変化を探る。そうすることで、従来あまり詳細に分析されてこなかったテキストと旅の関係に新たな光を当ててを試みたい。

アクセルはベアトリスのもとに行くだろうか？——『忘れられた巨人』と語り

弘前大学准教授 小野寺 進

ベアトリスがアクセルを残し、船頭によって息子の墓がある島へ渡るところで物語は終わる。アクセルはベアトリスのもとに果たして行くだろうか？これが問題の出発点である。

「何を忘れるべきか、いつ思い出すべきか」と忘却と記憶をテーマにしたこの小説の特色はその語りにあると言える。読者は三人称で語る遠い昔の物語世界内部に引き込まれ、その中でアクセルとベアトリスの旅物語を追体験する。老夫婦の旅はウィスタンとガウエイン卿の登場により、いつしか霧の正体であるクエリグ退治への探求へと変わり、やがて霧が晴れ記憶が蘇ってきた後は、自分たちの息子が眠る墓を目指す。その間、ガウエイン卿による追想の2度の語りと、最終17章の船頭が語りで物語は終わる。

本発表では、物語世界外の語り手の権威を危うくする一人称現在形で語る船頭の最終章に、作者イングロが読者を翻弄する新たな語りを検証したい。

第二室 (204教室)

司会 尚綱学院大学准教授 中 山 悟 視

『遠い声、遠い部屋』におけるアフリカ系アメリカ人の考察 ——ミズーリとジーザスを中心に——

東北大学大学院 徳 永 慎 也

トルーマン・カポーティ (1924-84) の初長編『遠い声、遠い部屋』(1948) は、アメリカ南部ルイジアナ州ニューオーリンズ近郊の寂れた田舎に立つ荒廃した屋敷スカリーズ・ランディングを舞台にし、13歳の少年ジョエル・ノックスが、そこで暮らす一風変わった人々との出会いを通し

て大きく成長するという物語である。本作品は、居場所がないという孤独を抱えた孤児である少年が、自分の出自を求めて旅に出るという自己探求の物語であると言える。また、一人の少年の成長を通して、アメリカ社会の周縁に置かれた者たち、とりわけ同性愛者の姿が描かれる。同時に、ランディングにおいて一緒に暮らしている「黒人」たちが、少年の成長に大きな役割を担っている。そこで、本発表では、本作品に登場するアフリカ系アメリカ人たちを分析し、「異常」であるとされた同性愛者だけでなく、抑圧された状況に置かれたアフリカ系アメリカ人が少年ジョエルに与える深い影響を考察する。

司会 秋田大学教授 村 上 東

“Fishing for Victory?” ——ヘミングウェイ「大きな二つの心臓のある川」と第一次世界大戦

八戸工業大学助教 畠 山 研

アーネスト・ヘミングウェイ (Ernest Hemingway, 1899-1961) の二部構成の短篇「大きな二つの心臓のある川」(“Big Two-Hearted River,” 1925) は主人公ニック・アダムズの孤独なキャンプと釣りを描く初期の代表作である。これまでの研究では第一次世界大戦から帰還したと思われるニックの肉体的、精神的な負傷からの回復や作品内に潜む大戦の影響が論じられてきた。本発表では大戦期の食糧問題とその背景を踏まえて作品を読み直し、ニックの釣りの意味についてさらなる読みの可能性を探りたい。

司馬遼太郎が見たアメリカ

山形大学准教授 金 子 淳

司馬遼太郎は、『アメリカ素描』(1986)で、アメリカを訪れた際の印象について綴っている。そこで、司馬は独特の文化観と文明観を披露している。「文明は『たれもが参加できる普遍的なもの・合理的なもの・機能的なもの』をさすのに対し、文化はむしろ不合理なものであり、特定の集団(たとえば民族)においてのみ通用する特殊なもので、他に及ぼしがたい。つまりは普遍的でない」。この文化観・文明観はどのようにして醸成されたのか。司馬の思考の流れを追っていくと過去のある体験に行き着く。それは、第二次世界大戦での体験である。敗戦を迎えた日、彼は自問する。「なぜこんなばかな戦争をする国にうまれたのか」。この問いに答えるため、司馬は自分自身に「手紙」を書いてきた。「手紙」というのは、一連の歴史小説である。すなわち、これが司馬の創作の原点なのである。これを踏まえ、司馬は、アメリカに何を見たのか、明らかにしていきたい。

第三室 (203教室)

司会 東北大学講師 三 上 傑

比較相関構文の移動分析

東北大学大学院 廣 川 貴 朗

これまで、比較相関構文 (Comparative Correlatives) について、第二節を主節として、第一節を第二節のCP指定部やCP付加位置に基底生成させることによって派生する基底生成分析 (den Dikken 2005, Iwasaki & Radford 2011, Iwasaki 2017) と、第一節を第二節内部でCP指定部に移動することによって派生する移動分析 (Taylor 2013) が提案されてきた。また、第一節についても、CPとする分析と、DPとする分析に別れてきた。本発表では、比較相関構文の移動分析を支持し、カートグラフィの枠組みにて、第二節を主節として、第一節が関係節を伴ったDPとして第二節の*v*P内に基底生成し、第二節内部でTopP指定部に移動することにより派生されると提案する。

~~~~~  
司会 会津大学短期大学部講師 五十嵐 啓 太

#### 名詞化における「非顕在的具現」と「顕在的具現」の対立： 「形態的有標性の仮説」に基づく日英語比較

新潟食料農業大学講師 西 牧 和 也

英語では、動詞派生の転換名詞が具体物を表すことがある (e.g. *a wash < to wash*)。日本語では動詞連用形が転換名詞の事例であると考えられているが、具体物を表すことはできない。動詞連用形が具体物を表すには、「物」などの具体名詞が必要となる (e.g. 「洗い\* (物)」)。本発表の目的は、日英語間には、なぜ、このような名詞化の相違が見られるのかを考察することである。まず、この相違は具体名詞の具現方法に関する相違として捉え直されることを指摘する。つまり、英語の転換名詞は非顕在的な具体名詞を伴うのに対して、対応する日本語では、具体名詞が顕在的に具現されていると想定する。そのうえで、この「非顕在的具現」と「顕在的具現」という対立は、三宅 (2017) が提唱する「形態的有標性の仮説」から導かれるものであることを主張する。この仮説のもと、当該の対立は日英語間の根本的な言語タイプの相違を反映する個別事例として分析できることを示す。

15時15分

## SYMPOSIA

英米文学部門 (202教室)

## モダニティの問題としての“dissociation of sensibility”を再考する

|       |               |      |
|-------|---------------|------|
| 司会・講師 | 東北文教大学短期大学部教授 | 今井裕美 |
| 講師    | 東京学芸大学教授      | 大田信良 |
| 講師    | 山形県立保健医療大学准教授 | 梶理和子 |
| 講師    | 成城大学教授        | 吉田直希 |

本シンポジウムは、T・S・エリオットのあまりにも有名なエッセイ“The Metaphysical Poets” (1921) で提示された“dissociation of sensibility”という概念を、21世紀現在のモダニティをめぐる議論を先取りしたものとして解釈することからはじめる。この感性をめぐる変化あるいは歴史的移行の痕跡を指し示すタームは、不思議なまでに一世を風靡した後に1957年頃にはすなわち米ソ冷戦構造が比較的安定し固定化されたといわれる時期には完全に時代遅れのものとされることになるのだが、ただし、というか、だからこそフランク・カーモードがあえてその歴史的意味を*The Kenyon Review* 19.2 (1957): 169-94 掲載の“Dissociation of Sensibility”という批評テキストにおいて、再論している。

このような英文学研究や批評理論の歴史もふまえたうえで、21世紀の現在、情動・アフェクトをめぐる議論が心理学化されている傾向をより適切な形で歴史的に思考しなおすために、18世紀半ばから末にかけて「英文学」にさまざまな表象されたセンシビリティやセンチメンタリズムの概念・イメージのいくつかを取り上げ(今井・吉田)、再解釈を試みる。そのうえで、「イギリスの世紀」への移行期あるいは転換期を徴候的に印しづけるフランス革命やロマン主義も視野に入れながらも、「オランダの世紀」といわれる17世紀資本主義の世界システムつまりマネーとパワーのグローバルな諸関係が出来しそれらが再編される歴史的契機にあらためて注目する。具体的には、チャールズ2世がオランダからイギリスに帰還しポルトガルから王妃をめとる王政復古期すなわち17世紀の政治文化と演劇ならびに劇場文化の空間の意味を吟味し直し(梶)、かつまた、20世紀半ばの冷戦期「英文学」や批評理論がグローバルに転回する歴史的過程を、モダニティの問題として、21世紀の現在からアクチュアルに歴史化する(大田)。

## スコットランド啓蒙主義におけるセンシビリティと「弱者」の感情作法

今井裕美

フランスでは、啓蒙主義者たちにより『百科全書』(1751-72、1776-80)が編まれ、知の体系を知識人が大衆に授けるという教育的構図により、フランス革命の思想的土壌が培われた。だが、同時代に発生したスコットランド啓蒙主義運動は、1707年のイングランドによるスコットランドの併合という歴史的事実に対する、単発的ではなく断続的に継起する一連の政治的対抗であり、

グラスゴー大学やエジンバラ大学の教授たちの主導のもと、イングランド式の非人間的な商業主義による精神的侵略への抵抗を目的とした。他者への同情や社会的正義といったスコットランド伝統の美德で国民の徳性を強化し、「弱者の内なる反乱」を可能にする知的・精神的土壌の醸成が図られたものである。注目すべきは、スコットランドの近代化＝モダナイゼーションを告げるこの啓蒙主義運動が、18世紀中葉以降の感傷文学 (sentimental literature) においてセンシビリティが頻出する時期と重なることである。

本発表では、スコットランド人作家ヘンリー・マッケンジーの『感情の人』(1771) や『世俗の人』(1773) を中心に、落涙を多用した共感や同情、自己憐憫といった感情表象を、「国民像」形成のための仕掛けとして再解釈を試みる。また、「弱者」に付される感情作法や当時の道德感覚、そしてフランス革命精神が通底するロマン主義的感性も視野に入れ、スコットランド啓蒙主義特有のセンシビリティを探る。

### 感じるジャコバイト——近代資本主義の小説的特質

吉 田 直 希

長い18世紀において、イギリスはいわゆる「軍事革命」により「財政＝軍事国家」へと変貌を遂げる。南海泡沫事件後、オランダの資本を呼び込み、対フランス戦争を継続的に遂行することにより、イギリスは国民意識を形成していく。ここで注目すべきなのは、名誉革命でフランスに亡命したジェームズ2世の子孫を正統な王位継承者とするジャコバイトが、長期に亘ってイギリスに対する脅威となり、この勢力に対抗するために、プロテスタントのブリテン人という意識が生まれた、というリンダ・コリーの指摘である。

本発表では、ヘンリー・フィールディングの小説に登場するジャコバイトの表象を、従来の政治思想史的観点から捉えるだけでなく、「財政＝軍事国家」イギリスという視点から読み直し、グローバルなセンシビリティの変遷を辿っていくことを目指す。その際、18世紀の初期に起こったセンシビリティに関する議論の多様性を確認しつつ、フィールディングにおいても登場人物の感受性が精神と肉体の両面から捉えられている点に注目しよう。このような作業を通じて、近代資本主義の小説的特質、言い換えれば「信用」というきわめて「リアルに」「本当らしい」フィクション・作りごと・「小説」にその再生産または持続可能性・反復可能性が担保される資本主義の特異な性質を考察することが可能となるだろう。

### 変わりゆくセンス・テイスト・センシビリティ——転換期としての王政復古期イングランド

梶 理和子

オランダでの亡命生活を終えたチャールズ2世が王座に就き、ポルトガル王女と結婚した時期から、1688年のジェームズ2世の追放に続き、オランダから国王を迎え入れて18世紀にいたるまで、イングランドは政治的・宗教的あるいは経済的・社会的に劇的な変化を経験する。カトリックに揺れ動いた宗教はプロテスタントへと、政治の中心は国王から議会へ、階級にかかわる価値観は土地所有・家系から資金力・情報力・経営手腕へと移り変わる歴史的傾向を示していくことになる。このようなさまざまな変革・転換の萌芽がうかがえる時期に、劇場あるいは劇場文化の空間では、職業的作家として初めての女性、アフラ・ベーン (Aphra Behn) が登場する。

本発表の目的は、このような歴史状況において、人々のセンスやテイスト、あるいはセンシビ

リティが揺らぎ多様化し、これらにかかわる概念や認識がマテリアルな諸条件に規定されて形成、変容される過程を確認することにある。この過程において、パブリックな空間に出現したより低い階級層・女性が自らの帰属意識、存在意義を見出していく、また、これら新興の人々のマネー・パワー、欲望の前景化により、支配的であったシステムや価値観が揺らめいていくことをモダニティの問題として考察する。そこで、イングランドのポルトガルやオランダとの関係、植民や交易による海外進出がもたらす影響等を視野に入れ、ペーンのセンシビリティにかかわる表象を検証したい。

# “After New Criticism”の、あるいは、(再)制度化されたモダニズムの、「英文学」・批評理論 ——転換期・移行期としての「グローバル冷戦」

大 田 信 良

本発表は、20世紀半ばの冷戦期における「英文学」や批評理論の歴史的解釈を試みるが、まずは、本シンポジウムのテーマ全体にかかわる、エリオット“*The Metaphysical Poets*” (1921)ととりわけそこで提示された“*dissociation of sensibility*”という概念を、21世紀現在のモダニティをめぐる議論を先取りしたものとして読み直すことから始める。形而上派詩人たちの“*their thought as immediately as the odour of a rose*”という感情構造あるいはthe “*direct sensuous apprehension of thought*” すなわち *the fusion of thought and feeling* の経験が、失われた、または、歴史的に変容したのが、17世紀であった。そして、そうした歴史的変容より適切には移行を規定した歴史的条件こそが、21世紀の現在、モダニティとよばれさまざまに議論されているものだ。

このセンシビリティをめぐる変化あるいは歴史的移行の痕跡を指し示すタームは、なぜある歴史的状況において、不思議なまでに一世を風靡したのか。と同時に、この17世紀という歴史性に特徴づけられたセンシビリティの問題(機制)が、その後に1957年頃には、すなわち、米ソ冷戦構造が比較的安定し固定化されたといわれる時期には、完全に時代遅れのものとされることになるのはどうしてか。本発表では、こうした諸問題を論じたカーモードの批評テキスト“*Dissociation of Sensibility*”を、あらためて、読み直し歴史化の作業を開始する、と同時に、“After New Criticism”の、あるいは、(再)制度化されたモダニズムの、「英文学」・批評理論を、批判的に検討するこの作業は、転換期・移行期としての「グローバル冷戦」という歴史的契機を21世紀のモダニティの問題によって再解釈することにもなるはずだ。

## 英語学部門 (203教室)

# 語用論と他分野のインターフェース ——言語学内外での語用論の応用可能性を探る

|       |             |     |    |
|-------|-------------|-----|----|
| 司会・講師 | 東北大学講師      | 三上  | 傑  |
| 講師    | 常磐大学准教授     | 高木  | 幸子 |
| 講師    | 常磐大学助教      | 坂本  | 暁彦 |
| 講師    | 広島大学特任講師    | 草薙  | 邦広 |
| 講師    | 会津大学短期大学部講師 | 五十嵐 | 啓太 |

Levinson (1983) や Yule (1996)、小泉 (編) (2001) といった語用論の概説書でまとめられている通り、当該分野における研究の中で、人の言語活動を捉えるために有用な概念や方法論が数多く提案されてきた。しかしながら、語用論の研究分野で積み重ねられてきたこうした知見は、語用論もしくは言語学内でのみ有効なものではなく、言語学内外における他分野の研究にも大いに活用できると考えられる (cf. 小泉 (編) (2001))。そこで、本シンポジウムは、言語学内外において語用論の研究分野で得られてきた知見を応用する可能性を探ることを目的とする。言語学内における語用論の応用可能性としては、三上が統語論との接点をテーマに論じる。一方、他の3つの発表は、言語学外分野と語用論の関係を扱う。高木・坂本は心理学、草薙は外国語教育、五十嵐は絵本研究の観点から本テーマに対して提言を行う。このように、本シンポジウムは異なる分野から異なる観点で分析を行う学際的な取り組みとして、語用論の応用可能性を探ることになる。

## 語用論的要素の統語操作との関わり方とその言語間変異

三上 傑

英語において、定形動詞は主語要素との間でPhi素性一致を起こし、主語要素はTP指定部へ義務的に移動するとされる。このように英語の統語システムを見る限り、統語操作の適用に語用論的要素が関与する余地はないように思われる。しかしながら、日本語統語論研究では、Miyagawa (2005) が焦点素性によって誘発されるA移動タイプのスクランプリングの存在を主張したり、Ura (2000) 等では話し手と聞き手の関係性やボライトネスが深く関わる尊敬語化現象がPhi素性一致現象の一種として分析されたりするなど、統語操作への語用論的要素の関与を示唆するような数多くの分析が提案されてきている。本発表では、統語システムにおける語用論的要素の位置づけに関して、Miyagawa (2010, 2017) が提唱する Strong Uniformity と素性継承システムのパラメータ化の観点から再検討することを試みる。具体的には、統語システムの中で中核的な役割を担っているとされる移動操作と一致操作を取り上げ、それらの統語操作に対して語用論的要素がどのように関わっているのかを解明する。そして、その関与の仕方について日英語間に相違をもたらすことになる統語構造を詳細に考察する。また、焦点素性によって誘発されるスクランプリングや尊敬語化現象の存在を手掛かりに、日英語対照による比較統語論研究を進展させ、多言語のデータに基づく言語類型論的議論も展開したい。

## 意外性に関わる言語形式と心理学における感情研究

高 木 幸 子・坂 本 暁 彦

情報源を言語的に標示する証拠性マーカー (evidential marker) の存在が以前から知られているが、それにまつわる研究を背景にして意外性 (mirativity) という意味カテゴリーの存在が指摘され、注目を浴びている (cf. Delancey (1997))。意外性とは話し手にとっての新情報・予想外・驚きといった意味を表すカテゴリーであるとされるものの (Delancey (1997, 2001))、その定義は確定的なものとは言えず、未だ検討の余地が残されている (cf. 五十嵐 (2015))。そこで本発表では、心理学において蓄積されてきた感情研究の知見から意外性に関わる言語形式へとアプローチし、意外性を定義するに際しての新たな視点を提供することを目的とする。たとえば、意外性を定義する際に新情報や予想外という概念と驚きという概念を並列的に扱っているが、心理学においては新情報や予想外は感情としての驚きと同義に扱うべきではないとの指摘がある (cf. Reisenzein (2000), 山根 (2005))。また、感情としての驚きは、他の感情と両立する側面が強いことが指摘されており、意外性に関わる言語形式を分析するにあたっては、こうした研究の成果を考慮に入れることが有益であると思われる。本発表を通して、言語学と心理学の新たな学際研究の可能性を探求したい。

## 外国語における語用論的適切性判断行動の数理

草 薙 邦 広

学習者は、母語話者と比して、語用論的能力に問題を抱えているとされる。たとえば、母語話者が語用論的に不適切だと判断する刺激について、学習者は至って適切であると答えることもある。このような観察の背景にあるメカニズムとして、これまで二つの説明が与えられてきた。ひとつ目は、弁別能仮説である。この仮説では、所与の言語的表現に対して、しかるべき語用論的適切性を紐づけできていないことが低成績の原因であるとされる。もう一方は、閾値仮説である。この仮説では、どの程度の適切性をもって適切だと判断するか、または不適切だと判断するかを規定する閾値の設定こそが低成績の原因であるとされる。著者らのこれまでの研究では、閾値仮説がもっともらしい説明であることがわかっている。そのもっとも明確な証拠は、閾値の人為的操作によって判断成績が飛躍的に上昇することである。たとえば、被験者を二群に割り当て、片方には「母語話者は、以下の刺激の半数以上を適切だと判断しています」という指示文を、もう片方には、「母語話者は、以下の刺激の半数以上を不適切だと判断しています」という指示文を与えると、後者の群の方が高い成績を示す。発表では、これらの知見をもとに、外国語教育における語用論的能力の定量化に関してさらなる検討を加える。

## 語用論の観点から見た絵本における画面間の連続性が生まれる仕組み

五十嵐 啓 太

普通、絵本は複数の画面 (見開き2ページ) から構成されており、画面と画面の間に連続性が生じることで物語世界が形作られる (cf. 藤本 (2007))。こうした画面間の連続性には、言葉が大きな役割を果たすことが指摘されている (cf. 竹内 (2002))。例えば、画面を中途半端な言葉で中断

したり問いかけで終わりにすると、読者に次の画面をめくりたいという欲求を抱かせることになる(笹本(2001))。こうした効果が画面間の連続性を生み出すのである。しかし、言葉と画面間の連続性の関係についてはそれほど積極的に研究されておらず、依然として取り組むべき課題が残されていると考えられる。そこで本発表では、語用論で得られてきた知見を用い、次の2点を明らかにすることで、絵本研究への語用論の応用可能性を探っていく。(1)いくつかの語用論的な概念(例えば廣瀬(1997)で提案された「公的表現」「私的表現」)を取り上げ、これらに基づいて画面間の連続性が生まれる仕組みの一端を明らかにする。同時に、(2)日英語の翻訳絵本を比較することで、両言語で用いられる画面展開の手法の違いも明らかにする。

## 大会会場（山形大学 小白川キャンパス）へのアクセス

JR山形駅から

- ・ 東方へ約2km（徒歩約25分）
- ・ 市内路線バス「県庁前・県庁北口」行きで「南高前・山大入口」下車（所要時間約6分）、そこから徒歩約7分

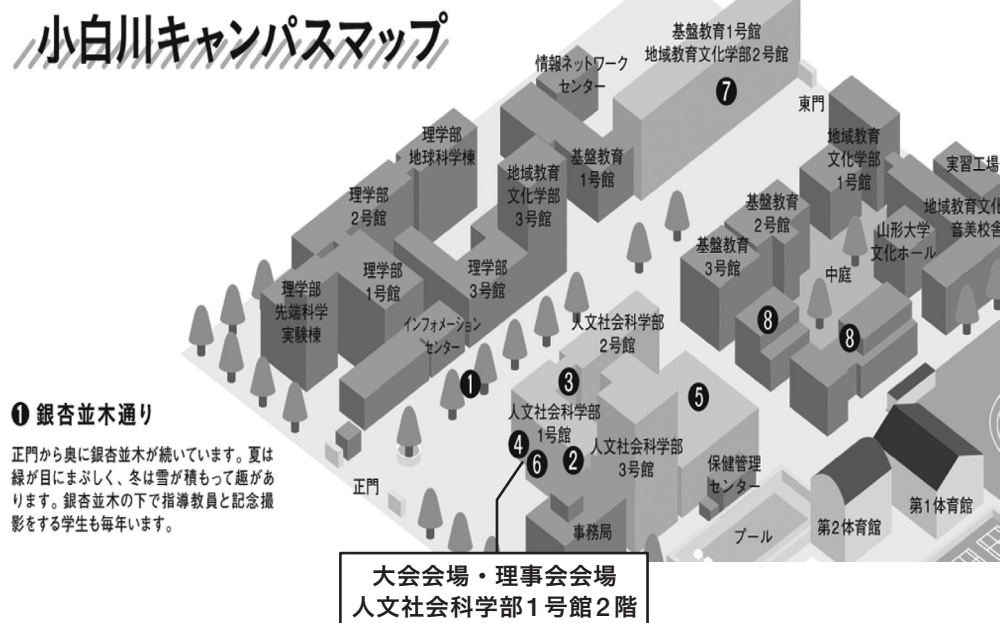
JR仙台駅から

- ・ 高速バス「山形行き」で「南高前・山大入口」下車（所要時間約55分）、そこから徒歩約7分

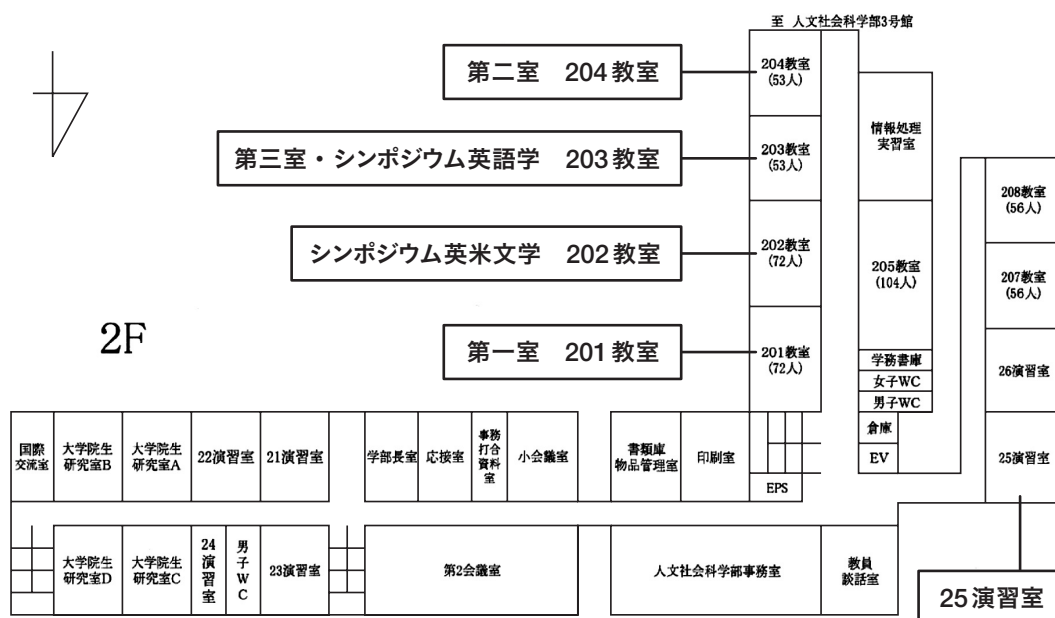
### 周辺地図



### 小白川キャンパスマップ



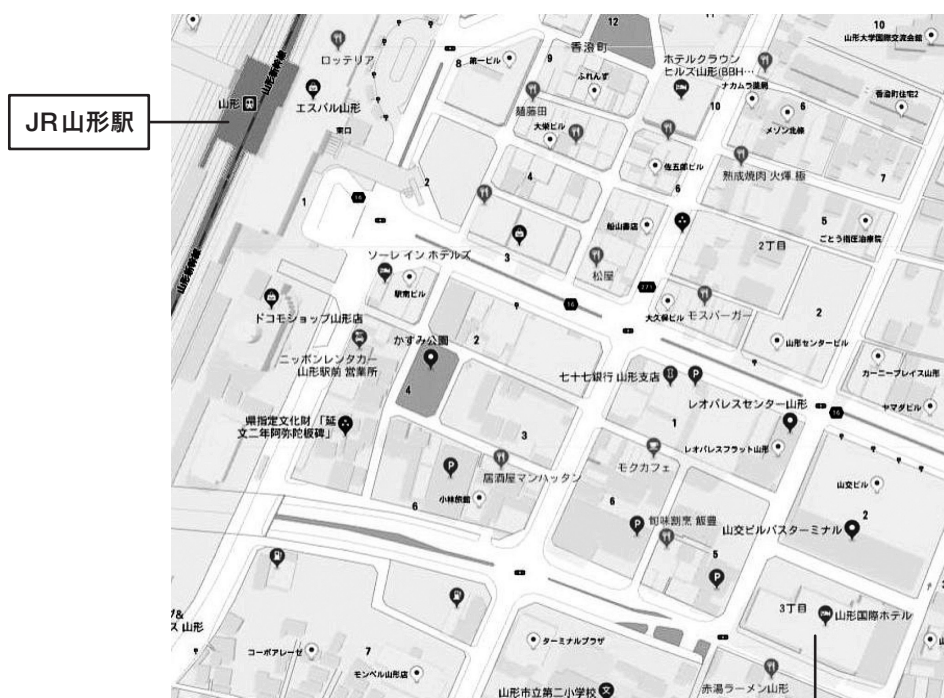
## 施設平面図(人文社会科学部1号館2階)



## 懇親会会場地図

会場：山形国際ホテル(山形市香澄町3-4-5)

JR山形駅東口より徒歩6分、駅前大通り直進、山交ターミナル南側



(Google Map より)